

野の仏さまにおききしました

2023.5.1(月) NO16

時々、フッと「孤独」を感じる人は合格です! なぜなら……(老子の言葉より)

実は、こんな孤独感を味わったことがある人こそ、「自分らしい生き方」をしている幸せな人だと思います。「世の中の人たちはみな、ウキウキ(GW)と楽しそうにはしゃいでいる。でも私はじっと動けずにいる高齢者だ。人はみな、チャンスをつかんで成功しているのに、私だけ、ボーッと置いてチャンスを逃しているようだ」しかし、野の仏さんは、決して否定的に考えてはられません。

だがそれは、自分らしい生き方をしっかり持っている証だ。

私はこの生き方に誇りを持っている。幸せも感じているとお話しされています。

「敵は本能寺にあり」

たった一つの言葉が、その後の歴史を大きく変えることもあります。

そんな言葉は、たとえ深い含蓄がなくても名言といってよいでしょう。その代表的なものは明智光秀の『敵は本能寺にあり』です。日本を手中に収めかけていた織田信長は、中国攻めを行っていた羽柴秀吉の応援に向かう途中で京の本能寺に宿泊していました。そんな折、同じく秀吉の援軍として出発した明智光秀が、突然本能寺に向かうと、敵は本能寺にありの一言とともに、信長を攻め滅ぼしてしまったのです。

この瞬間、歴史は大きく転換し、豊臣秀吉、徳川家康へと天下が移り変わっていったのです。

明智光秀の一言が、江戸幕府成立までの流れを決めた一つの分岐点になっているのです。



伝・家康ひそみの藪

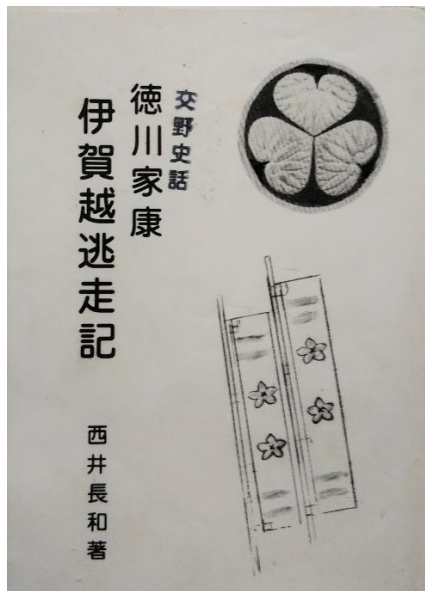
三河の国への脱出ルートは「ひそみの藪」で

天正十年(1582)六月二日の明け方に織田信長が京都本能寺に於いて、家臣明智光秀の反逆によって自害し果てたとき、信長と同盟を結んでいた徳川家康は、少人数の近臣を連れて舶来文化の輸入地である堺に見学のため滞在していた。

当時、信長の強大な勢力によって一応近畿は平定され治安は保たれていたが、その盟友を失った時の立場は極めて微妙にならざるを得なかった。幸い、「信長死す」の情報がいち早く家康のもとにもたらされると、身の危険を察知して、すぐさま堺を退去して本国三河に帰ることにした。星田の伝承では、星田妙見宮の参道の入口の北に家康が堺から逃げ帰る途中、一時この藪に潜んでいたと言われている。



古文化同好会建立碑



伊賀越逃走記(西井長和著)



ルート絵図

文献

信長公記卷十五(天正十年)

(39)徳川家康、堺から退去

こうしたなかで、徳川家康・穴山梅雪・長谷川秀一の一行は、和泉の堺で信長父子自害のことを聞き及び、取るものも取りあえず、宇治田原を経て退去した。

しかし、途中で一揆勢に遭遇し、穴山梅雪は殺害された。徳川家康と長谷川秀一は、桑名から舟に乗り、熱田の港に着いた。

=逃走経緯=

・家康 信長から駿河国をあたえられ、三河・遠江(とおとうみ)・駿河三か国の大名となりました。

・家康 5月15日、安土城へ信長に会いに行く。

まずは、武田の旧領、駿河をいただいたお礼を申し上げます。

・信長 なんの、そちの働きじゃ。

・家康 ありがとうございます。これからも出来る限り、お力添えをいたします。

・光秀 かたぐるしい挨拶はもうよい。

家康殿が安土に滞在中はこの明智光秀が接待役じゃ、なんなりとお申しつけください。

・家康 安土に滞在中、信長から数々のもてなしを受けました。そして家康殿は京や堺を見物して帰るがよい。

・家康 5月21日、京を見物し5月29日、堺に入る。

平和なひとときを過ごした後、わずかな供と堺を出発し、信長に、おいとまごいをするため京へ戻る予定。

・老臣 6月2日の朝暁、信長様が明智光秀の謀反により殺されました。何!信長殿が討たれた。

今に明智の手の者が押し寄せてまいりましょう。

・家康 急遽、本国三河の国元へ

伊賀越逃走記のはじまり

家康主従は直ちに堺を離れることになり、家康と老臣は馬に乗り柏原の船着場まで急行した。小舟数隻に分乗して湖沼北東に向かって四里の舟路を御供田に至る。この所より水面が連なっていた深野池を約一里、飯盛山麓で下船。住吉平田神社の神職の家に入った。この時、茶屋四郎次郎より信長父子の滅亡を詳しく聞き知ったのである。明智方の検問が厳しく容易である。家康はこの所より星田までの通路に明智方の見張りの者や土冠や一揆などが出沒していないか詳しく調べよ。幸運にもそうした気配が全くなかった。夜が深く更けてから神職の家を出発して星田に向かった。家康は人家のある村中じゃなく、妙見宮の入口の所に来た(これは住吉平田神社から妙見宮の神職に紹介があった)。星田北の庄の地頭であった平井三郎右衛門の家、家臣の幾人かを使者として行かせた。山城の木津川べりに出る山間の道に精通している村人を斡旋してくれるように依頼。道案内人を依頼した者が帰ってくるまでの間、竹藪の中で待っていた。道案内できる者、「沙弥安」と「けんしき」の二人が選ばれた。ひそみの藪、穴虫山、日南山、哮ヶ峯、飛石、西庄田、高船、多々羅、飯岡、木津川渡る(木津川べりの村まで案内をした沙弥安とけんしきの二人であった)

徳川家康(1542-1616)のプロフィール

徳川家康は、岡崎城主・松平広忠の子として誕生。

織田氏と今川氏という二大勢力に挟まれた小大名であったため、幼少のころは、織田・今川両家の人質として過ごしました。

今川義元が敗死すると独立し、織田信長と講和を結び、後に三河を平定しました。

その後も遠江、駿河と領地を広げていきましたが、やがて織田信長が自刃。

勢力を伸ばした豊臣秀吉と小牧長久手で戦いましたが、結局秀吉に従い、講和を結びます。

北条氏滅亡後は関八州(関東八か国の総称)に封ぜられ、江戸に本拠を置きます。

秀吉の死後、巧みに勢力を伸ばし、関ヶ原の戦いで天下人としての地位(征夷大將軍)を確立。

江戸幕府を開きます。その後は幕府の安定に注力、徳川 300 年(265 年)の礎を築きました。

「人の一生は

重荷を負うて

遠き道をゆくがごとし

急ぐべからず」

野の仏さんはおっしゃいました。

徳川家康が本能寺の変に際して、堺から三河の国へ脱出逃走は、家康の生涯における最大の危難といわれているが、その逃走ルートについては未だ定説がないが土地の伝承をもとに組み立てられたもの、とお聞きものです。

(参考資料) 交野史話 徳川家康 伊賀越走逃走記 西井長和著